

名城大学薬学部臨床薬学研究室 10 周年記念誌

研究室 10 年のあゆみ

平成 14 年 12 月

この10年を振り返って

臨床薬学研究室
教授 西田 幹夫

臨床薬学研究室は、平成5年4月開設以来、本年で10年の節目を迎えました。ここにご挨拶を申し上げます。

当研究室は、薬学専攻科のさらなる発展に貢献することを目的のひとつとして開設されました。薬学専攻科には当時既に18年の歴史があり、臨床薬剤師養成のメッカとして、対外的には全国にその名を知られる存在でした。しかしながら、この長い年月を、スタート時の理念と勢いを発展的に持続させるのは至難の技であることは何処も変わりありません。薬学部の首脳陣には、このユニークな教育機関を一層強化すべく「何かをしなければ…」との思いが有ったことは想像に難く有りません。平成2年に編集された「薬学専攻科15年のあゆみ」の中には、専攻科の教育・研究を専門的に指導できる新たな研究室を作る必要性が既に記載されていました。

研究室の開設当時、構成員は私と稲垣員洋助手の二人で、半年遅れて岡本能弘助手が加わり3人となりました。当時、ただ今の研究室（5号館4階西側）の整備が完了するまで、私は3号館2階（非常勤講師休憩室）に、稲垣君は当時の医薬情報センター（現在の大学院専攻科室 5号館4階中央）に間借りしていました。その後、1年余りの間に、学部の援助、大学院重点特別経費助成、後援会等のご支援を戴き急速に設備充実を計ることができました。私達スタッフも、静岡県焼津市にある企業にまで、レンタカーと乗用車を列ねて、中古実験機器を買い出しに出かける等の努力もいたしました。

薬学専攻科は、当時、稲垣君が米国留学から帰り、教育を担当し、1-2名の臨時職員が補佐していました。また、医薬情報センター職員が2-3名いました。私の赴任当時は、半谷眞七子 助手は臨時職員でありましたが、1年程たって専攻科担当専任となり、後に助手に昇格して平成11年まで当研究室に所属していました。

次に、臨床薬学研究室として取り組んだ専攻科教育支援活動を思い付くままに綴ります。まずは、カリキュラムの整備、すなわち、講義・演習・実習・臨床研修の明確化、新規研修病院の確保、非常勤職員の処遇整理、専攻科運営費の節減、薬学専攻科と新設の大学院医療薬学専攻との整合性・単位互換制の確立、研修病院指導者の講師・助手次いで臨床教授委嘱制度の導入、海外研修先の確保を目指した大学間協定の締結、専攻科専任助手の再確保、専攻科創立20周年記念事業、医薬分業フォーラムとクスリになる話ラジオ放送、東アジア臨床薬学カンファレンス、等がこれに当たります。一つ一つの活動には、学部や法人当局、同窓会、後援会、病院薬剤師・薬剤師・医師・歯科医師の各会、県庁、企業、マスコミ機関等数えきれないところからの応援を戴きました。こうした教育・研究・社会的環境の整備を通じて、専攻科修了生達は前にもまして積極的に社会活動や学会活動をするようになりました。私は、教育機関としては、基本的に、専攻科履修生の数を大幅に増やし、大学院に昇格させて、修了生を病院だけでなく街に広く展開できることを望んでいました。履修生数の大幅増しは、突然襲った経済的な不況や、全国的に芽生えた医療薬学・臨床薬学研修機関の増加の影響を受けて実現に至りませんでした。大学院への格上げは、平成11年4月、新たに専攻科指導者としてお迎えした松葉和久教授の努力によって、平成15年4月に開設の予定となりました。ここに至るまで、私が、医師会、薬剤師会、病院、薬局、メーカ支店、県庁等に出かけることが多く、その分研究室のスタッフ、学生諸君には不便を掛けましたが、皆さんに大いに助けてもらい、曲りなりにも責任を果たすことができました。

さて、平成6年4月から研究室には、学部第1期生15名が入室致しました。以来平成14年3月までに学部卒業生は88名になりました。私が、薬学生は全員卒業論文実験をやるべきだという考えを抱いて居りましたので、平成9年頃までは4年生全員にコースの別なく何かテーマを持って実験をやってもらいました。後年、学部には卒業論文コース、ゼミナールコースの採択比率が申し合せられていると聞いて、方針の変更を致しました。実験テーマは、いずれも臨床現場から派生した問題点を追いかけてきました。大体の分担は、私が生理・ホルモン分野、稲垣君は医薬情報関連・ドラッグインタラクション分野、岡本君がサイトカイン・遺伝子診断分野となりまして、ささやかな研究を学生諸君とともに続けてきました。大学院修士課程の第1期生は、原祐輔、稲垣正己の両君でした。二人には、まだ大学院生の実務研修制度が明確になっていなかった頃、それぞれ病院研修3ヶ月間を実施したのが今日の長期研修(12ヶ月以上)を取り入れる発端となりました。当時、院生の3ヶ月実務研修は画期的なことでありました。当研究室から大学院への進学者は31名になりました。研究員は病院や薬局の薬剤師、医師、歯科医師、愛知県の機関に在職の方々が入れ代わり立ち代わり、それぞれのテーマをもって研究しております。

当研究室は、研究室のセミナーやセミナー旅行、のみならず工場見学、産官学のコンベンション参加、大学祭参加、外国人や企業からの訪問者達との交流、学内外の懸賞論文応募、新年互礼会等、等にこだわって、時間のない時も、苦しい時も学生諸君と共に頑張ってきました。同門の方々は今如何に感じて居られるでしょうか。

研究室スタッフから平成12年4月に稲垣君が医薬情報センターへ転出し、専攻科の半谷君は、現在松葉先生の配下におります。平成13年4月には、岡本君が米国に留学し、本年6月に帰国しました。

この度の開設10周年記念と致しましても、なんら賑やかなことは計画致しておりませんが、研究室成長の通過点として、なにかを記念に残しておきたいと考えまして、この10年の歩みを作成致しました。

これまでにお世話を掛け、また惜しみなく激励くださった学内外の皆様には心からお礼を申し上げます。これから当研究室が発展していく過程では倍旧の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年11月

名城大学薬学部での 10 年

臨床薬学研究室
助手 岡本 能弘

多くの人々のご支援を賜り、臨床薬学研究室が開設以来 10 年を迎えました。名城大学での、この 10 年間の私自身の研究・教育活動を簡単に振り返りたいと思います。

(1) 本研究室で取り組んだ研究について

本学臨床薬学研究室にて西田教授の指導のもと、私が主に取り組んできた研究プロジェクトは、大きく分けるとサイトカイン関連の研究と遺伝子解析に関する研究に大別できます。

サイトカインに関する研究

サイトカイン類は、免疫システムをコントロールしている生理活性物質です。何か病気になった時には、体内のサイトカイン産生状況が変動します。よって、これらサイトカイン類の産生状況をモニターすることにより、疾患の診断や病態解析が可能と考えられます。そこで、私たちは免疫化学的技術を応用し、数種のサイトカイン、および、可溶性サイトカイン受容体の高感度測定方法を開発してきました。その中でも Stardust 法 (Dual Color ELISPOT 法) は、複数種のサイトカイン産生細胞の数を低コストで同時分別定量を可能とする新しい測定方法であります。この Stardust 法について解説した総説論文は、最近、世界最新の代表的サイトカイン解析方法を集めたプロトコール集にも掲載されるなど、評価されています。これ以外にも種々のサイトカイン測定法を確立し、実際の病態解析に応用し、関節リウマチをはじめ、種々の疾患の病態解析にサイトカインの解析が有用であることを証明してきました。これら免疫・サイトカイン関連の研究成果は、第一期生の大塚知世 (旧姓 竹市) さんから始まり、多くの配属学生のみなさんに卒業論文のテーマとして取り組んでいただいた成果です。私は、これらの研究成果で平成 11 年に学位 (薬学) を取得することができました。さらに、この研究成果の中からは、平成 13 年には、研究員の名古屋第二赤十字病院の後藤芳充 先生が学位 (医学) を取得されました。

現在、これら開発したサイトカイン測定方法を用いて、小児腎疾患の病態解析を行うため、小牧市民病院、名古屋第二赤十字病院、あいち小児保健医療総合センターをはじめとする近隣医療機関との共同研究を活発に行っています。

遺伝子解析に関連する研究

遺伝子解析に関する研究では、これまで主に先天性血液凝固異常症の原因となる遺伝子異常を同定し、疾患発症のメカニズムを遺伝子レベルで解明し、その診断の確定に貢献してきました。この研究は、第一期生の原 祐輔 君 (現 金沢大学医学部付属病院) の修士課程時代の取り組みから始まりました。現在も、大学医学部付属病院のように研究施設を持つ病院は自施設で遺伝子レベルの研究が行えますが、通常地域病院は自施設で遺伝子解析を簡単に行えないため、私たちのもとに患者の遺伝子解析依頼が多数寄せられています。

私は、さらにこの遺伝子解析関連研究を発展させるため、昨年、米国アラバマ大学バーミングハム校へ留学する機会を与えられました。そこでは Prof. R. Diasio の指導のもと、癌化学療法に関する最先端のファーマコゲノミクス研究に取り組みました。ここで、私は、薬物代謝酵素の遺伝子多型 (SNP, Single Nucleotide Polymorphisms) の新しい検出方法を開発することができました。ファーマコゲノミクスの研究領域は、近年、日本でも活発になってきていますが、東海地区では現在のところは、あまり活発に行われていないようです。将来の個別化医療実現には重要な研究領域であり、この分野は薬剤師が積極的に関わっていくことのできる分野と思います。私は、この研究を

将来さらに発展させることを計画しています。薬剤師として働いている卒業生の皆様にも是非興味をもっていただき、ご支援願いたいと存じます。

(2) 教育活動について

私は、主に、研究室配属学生の教育と学部学生実習(2年生 生物系基礎)を担当してきました。実習では特に、生体の構造と機能の関連(機能形態学的な見地)から、学生に動物解剖を指導し、生体構成成分が化学物質から成り立っているゆえ、薬物が反応するという考えを紹介してきました。学生実習は配属学生の皆さんにも、その実習の実施を手伝っていただいたので、印象に残っていることと思います。

同時に、私は、本研究室の性格上、薬剤師教育、薬剤師活動支援にも多く関わる機会を持つことができました。これらの活動は現在、全国薬学部が薬剤師養成機能の強化を求められていることから大変重要な活動であると考えています。

私は、米国留学時、本学と学術交流協定を締結しているサンフォード大学薬学部、および、その関連病院にて薬剤師臨床実務研修を受け、先進的な米国の臨床薬剤師の業務を学ぶ機会を持ちました。これらの臨床実務経験を本学での薬剤師教育、近隣地域で勤務する薬剤師の活動支援に生かそうと思っております。また、この米国での実務研修内容の報告が近日、日本病院薬剤師会雑誌に掲載される予定です。機会があればご一読ください。

最後に

以上に述べました10年間の成果は、西田 教授、稲垣 助教授、半谷 助手、そして、これまで本研究室に所属された卒業生の皆様はもちろんのこと、学外の諸先生方にも多くのご支援を賜りました。鈴木康夫 教授(静岡県立大学薬学部)には学位論文作成、審査に際し、お世話を賜りました。後藤芳充 先生(名古屋第二赤十字病院)、上村 治 先生(あいち小児保健医療総合センター)、安藤 恒三郎 先生(名古屋第二赤十字病院副院長)、大野敏行 先生(小牧市民病院)にはサイトカインに関する研究、遺伝子解析研究に多大なご協力、ご支援を賜りました。名古屋大学医学部の山崎鶴夫 先生、小嶋哲人 先生、斎藤英彦 教授(以上第一内科)、鍋島俊隆 教授(薬剤部長)には遺伝子解析研究の基本的技術を習得するとともに、世界最先端の血液凝固異常症の分子レベルの研究に携わらせていただく機会を賜りました。石塚 寛 教授(徳島大学歯学部、現 日本指圧専門学校)、日本電子株式会社の皆様には学位論文の重要なデータとして必要であった電子顕微鏡解析に関してご支援、ご指導を賜りました。亀山 洋一郎 教授(愛知学院大学歯学部長)をはじめとする歯学部病理学講座の先生方にはサイトカインの研究を歯学領域へ応用していく機会を賜りました。最近では、米国アラバマ大学留学に際し、直接研究をご指導いただいた Robert B. Diasio 教授(Division of Clinical Pharmacology, Comprehensive Cancer Center, University of Alabama at Birmingham)、また、その機会を作っていただき、現地では生活面でもお世話いただいた Dr. Constance Pittman、Dr. James A. Pittman 夫妻に深く感謝いたします。そして、留学時に臨床薬剤師実務研修の機会をお与えくださったサンフォード大学薬学部の Joseph O. Dean Jr. 学部長、Robert P. Henderson 教授、さらに、直接の臨床研修のご指導を賜った Dr. J. Beall、Dr. S. Yocom (HealthSouth Metro West Hospital)に深く感謝いたします。

最近、薬学部をとりまく状況が激変する時期に来ているという話があります。皆様の今後のさらなるご活躍を祈念するとともに、今後とも、本研究室の発展にご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成 14 年 11 月

旧職員からのメッセージ

名城大学薬学専攻科
助手 半谷 眞七子

臨床薬学研究室 10 周年おめでとうございます。

私が再び名城大学薬学専攻科を担当した時と臨床薬学研究室の誕生は、ほぼ同時期でしたので、この 10 年間に想い出し、少々感傷(?)にふけております。第 1 期生の学生 15 名は、特に印象深い学生さん達でした。あの頃、西田先生の学生たちに言う口癖は、「大工仕事とそうじ」でした。まだ誕生したばかりの研究室でしたので、整備もされておらず、西田先生、稲垣先生、岡本先生、そして学生さん達で、一から作り上げました。セミナー、学生実習、卒論、なども試行錯誤の中ですすめられました。あの西田先生の何でもやろうという精神のもとで、第 1 期生は本当に涙が出るくらい「素直」についていきました。私が特に印象深いのは、年も押し迫る頃に、ニューヨークアカデミーから、何十ページにもわたるスピルバーグの手紙が来た時のことです。何か良くわからないうちに、西田先生がそれを翻訳しようと言い出して、結局学生達が分担して翻訳する事となりました。その結果は、数年間セミナー室の壁面に飾られておりましたので、目にした人は多いと思います。今では、遠い記憶なので曖昧になっている部分もあるかもしれません。しかし、卒論やら、実習の準備やらある中で、学生たちは夜遅くまでパソコンを駆使してひたすらに完成を目指しました。その「前向きな姿勢」を今でも忘れる事が出来ません。また、西田先生、稲垣先生、岡本先生方の「粘り強い」学生指導も、ただただ頭が下がるばかりです。

臨床薬学研究室に居候していた数年間は、先生方、また学生さんたちから色々勉強させて頂きました。この紙面を借りてお礼申し上げます。

最後になりましたが、臨床薬学研究室が今までの 10 年間に糧として、さらに大きく飛躍する事をご祈念いたします。

平成 14 年 11 月

卒業生からのメッセージ

10周年記念に寄せられた卒業生からのメッセージを収載したものです。

第一期生（平成7年3月卒業）

西川 典子（旧姓 大島）

10年一昔と言いますが、私が学生だった頃から10年もたってしまったのですね。いろんな思い出がありますが、セミナーで慣れない英語の論文に頭を悩ませたことがよく思い出されます。今でも続いているのでしょうか。私事ですが、今年の3月、3つ子を出産し、今は育児の真っ只中。汗とヨダレにまみれる毎日で、仕事とも大学とも、まして英語の論文とも縁遠い生活を送っています。何年か先には復職できることを願いつつ...研究室の益々の発展をお祈りしております。

松本 かおり（旧姓 山下）

娘の果恋は10/31で1歳になります。まだ小さいので参加することができません。申し訳ありません。もし行けるようであれば、同門会の前に娘と共に顔をだそうかな...と思っております。その時は、よろしく願います。

皆さんのますますのご活躍、お祈りしています。

加藤 容子

最近、テレビで医療事故のニュースが流れています。調剤薬局にいと、他人事のように思えません。実際、大事にいたらないだけで、調剤過誤も起こり、「ヒヤリ・ハット」もよくあります。患者様の健康を預かる身です。毎日、緊張しながら仕事にはげんでいます。

中根 茂喜

創立10周年おめでとうございます。

これからも「臨床薬学」の名前に負けないような研究室の御活躍を楽しみにしています。私も病院薬剤師として機会があれば研究室の発展に協力したいと考えております。

稲垣 正巳

10周年おめでとうございます。

私達が臨床薬学研究室にお世話になり、あれから早10年経つことになるとは。あのころは、研究室の掃除に始まり、備品収集、そして大工仕事までが...。他の研究室配属生とは、とても会話がかみ合わない日々でした。とても記憶に残る第1期生でした。これからもそんな臨床薬学研究室がますます発展していきますように。

稲垣 玲子（旧姓 大島）

第1期生として臨薬に入り、先輩達のいない中、直接先生達に御指導して頂き、他にはできない経験ができたと思います。

そして今、臨薬10周年を向かえ、大変うれしく思います。

ただ1つ心残りが…。実験にラットを何十、何百と犠牲にし、供養せずに今も過ごしていることが…。

中野 宏

身も心も一まわりも、二まわりも大きくなり、食欲の秋かな。

関戸 いづみ(旧姓 松田)

研究室創立10周年おめでとうございます。

西田先生、岡本先生、あつという間の10年間だったのではないのでしょうか？今後の研究室のますますのご活躍と発展をお祈りします。

私たち一期生がお世話になった時から、もう10年近くも経っているなんて…と感慨深く感じています。久しぶりに一期生の卒業アルバムを開きながら、研究室での出来事を懐かしく思い出しました。「10年後の　　さんは…」というテーマの寄せ書きがアルバムに載っていますが、そのとおりになっている人もいて、ちょっと笑ってしまいました。

研究室での思い出で最も心に残っていることは、勝浦へのゼミ旅行です。また、一期生ということで、ほとんどのことが初めての試みだったからか、他の研究室にはないような団結力で、勉強や実験、遊びに取り組みました。そのすべてが良い思い出になっています。研究室にいた時の団結力のおかげか、卒業した今でも同期とは集まる機会があります。この同期とのつながりは、私にとって本当に貴重な財産だと思っています。

最後に私の近況報告ですが、現在は子宝にようやく恵まれ、もうすぐ4か月になる娘の育児中心の生活を楽しんでいます。仕事の方は育児休暇をいただいておりますが、来年の2月には復帰する予定です。今後は育児、家事、仕事と多忙な日々が続くと思いますが、可能な限り細々と薬剤師業を続けていきたいなあと考えています。

木下 友紀(旧姓 大角)

臨床薬学研究室創立10周年おめでとうございます。

私と研究室との出会いを思い出していました。大学3年生で、研究室の配属希望を考えている時、西田先生を訪ね、先生の熱意にとっても圧倒されたことが懐かしく思い出されます。

これからも、研究室のさらなるご発展をお祈り申し上げて居ます。

第二期生(平成8年3月卒業)

鈴木 智奈衣(旧姓 渡辺)

研究室に在席していた一年はいろんな意味でたくさん勉強した年でした。

先月(9月)に第3子を出産しました。今は育児で忙しい毎日ですが、近いうちにまた復職したいと思っています。

上窪 浩子(旧姓 村上)

研究室創立10周年おめでとうございます。

節目の年の同門会に参加できず申し訳ありません。

私も今年は結婚し、人生の節目となりました。仕事は変わらず、処方箋 1 日平均 100 枚ほどをこなす京都の調剤薬局に勤めています。元からの整形外科に加え、近くの内科も全面分業となり、人手不足も重なって毎日忙しくしています。

大塚 理恵（旧姓 岩月）

松山からこのハガキを書いています。

9 月 4 日に長女 琴子を出産しました。現在は育児中で、新米ママとして子育てを楽しむ毎日です。思い通りにはいかないところがおもしろいのかもかもしれません。

北川 百合子（旧姓 宮本）

私は 2 期生ですが、研究室が創立してからもう 10 年も経つのですね。自分もそれだけ年をとっているのについこの間まで大学生だった気がします。夜遅くまで研究室で実験をしていたり、週回のゼミに必死だったのを思い出します。

私も昨年結婚し、仕事と家庭の両立で充実した毎日を送っています。

第三期生（平成 9 年 3 月卒業）

丹羽 隆

研究室創立 10 周年おめでとうございます。私は学部 4 年、修士 2 年の 3 年間お世話になりました。3 期生である私がいた頃は、研究室としては 1 年間のリズムが確立されつつあった頃ではないかと思います。「おまえの字は小さくて読めないんだよ!!」、「評価というものは他人がするものなんだよ!!」などよくお叱りを受けたことを覚えています。

現在私は、昼間は病院で薬剤師をやりながら、夜間は医学研究科の大学院生（社会人入学しました）としての生活を送っています。毎日、薬剤師としての仕事を終えてから実験を開始し、日付が変わってから帰路につき、休日も研究室に入り浸る生活をしています。研究室のセミナーは発表も質問もすべて in English なので、最初はかなり苦労しました。研究の世界に再び入ったわけですが、修士の時には全く聞いたことのなかった新しい用語が当たり前使用前に使用されるのを目の当たりにし、技術の進歩に驚くばかりです。

最後になりましたが、今後の研究室のますますの御発展をお祈りします。

丹羽 雅子（旧姓 加藤）

西田先生、御無沙汰しております。この度は、研究室 10 周年おめでとうございます。私が先生にいろいろお叱りを受けながら卒業してもう 6 年も経ってしまい、月日の流れの早さを感じます。卒業して 6 年の間に、結婚し子供も生まれました。現在、主人は第 2 の西田先生のような生活をしています。すなわち、日々研究に没頭しており帰宅時間もほとんど午前 2 時すぎです。私は、毎日家で娘と格闘しています。仕事は、結婚を機に正社員から準社員になり、さらに育児休暇明けからは 1 日あたりの勤務時間を短縮して、その他は母親業に徹しています。育児休暇のわずかな間に会社のシステム、医療関連法規などが改正され、復帰後は戸惑いを覚えました。家事・育児・仕事の並立はなかなか難しいのですが、がんばっていきたいと思っています。

最後になりましたが研究室のますますのご発展をお祈りいたします。

高木 陽子

調剤薬局に勤務しています。

加藤 やよい

創立 10 周年おめでとうございます。

最近、私の周りで変わったことと言えば、昨年それまで働いていた会社を辞め、知人の経営する薬局に転職したことです。まだ、創立 3 年目でこれから規模を広げていこうとする若い会社で、働きがいがあります。この研究室同様、今後の発展を願い、少しでも、その力になればと思っています。

村田 明隆

早いもので、我々が研究室 臨床薬学研究室も 10 周年を迎えることになりました。まずは、この節目の年を迎えられたことを心よりお祝いを申し上げたいと思います。私は、4 年次から在籍していた学生ではありませんでしたが、大学院生として当研究室に籍をおきました。

研究室での思い出といえば、他の OB の方々と同じとは思いますが、第一は、よく怒られたということでしょう。西田先生に怒られ、稲垣先生に怒られ、その当時のことを思い出せば、今でもトラウマのごとく冷や汗がしたりできます。しかし、その怒られ続けた 2 年間で今は貴重な財産となっています。西田先生には、仕事に対していかなる姿勢で取り組んでいけばよいのか、稲垣先生には、実験研究をするに当たっての心構え、基本的な手技、考え方、特にこれらのことは、調剤業務にも通じることがあり、今では非常に有り難いご教授であったと感謝の気持ちでいっぱいです。院生時代の実験では、4 年次にはほとんど実験らしき手技も学ばず来たため、非常に苦労しました。夜中の 2 時まで HPLC を動かし、当然のごとく研究室に泊り込み、翌朝は朝の 5 時から実験開始といったことを 2 ~ 3 ヶ月続けていました。にもかかわらず、ほとんどデータが取れず、ただただ時間が過ぎていく毎日…。いうなれば、どん底の日々でした。途中で投げ出したくなる時もありましたが、それでも時々出てきたデータに対し、西田先生からのお褒めのお言葉をいただいた時には、たいへんな喜びを覚えました。それをバネにがんばっていたような気がします。今思えばよくがんばれたなと思います。この時の経験が、いまだこんなに辛くてもがんばれている原動力になっています。

辛いこともありましたが、楽しい思い出もいっぱいあります。皆でクラブハウスのベランダでバーベキューをやったことや、和歌山の西田先生のご実家にセミナー旅行に行ったこと。その時、西田先生に作っていただいたかき氷の味は、今でも忘れられません。

その中でも、修士 2 年次に、同期の永井博先生とともに学会発表に行った時のことは、一番の思い出です。互いに発表練習をし合い、いつのまにかお互いの演題発表をコピーできるようにまできました。さあ、現地へ出発だ！！という時に、私が忘れ物に気付き、予約してあった新幹線の指定席もオジャン。泣く泣くふたりで横浜まで新幹線の通路に座って移動という羽目になりました。それでもめげずに、ホテル到着後、二人で発表練習や質問対策をやり、気がつけば夜中の 2 時でした。案の定、翌日は二人とも寝坊し、朝食も取らずに会場に飛んでいきました。当然、二人とも真っ青です。そんなこんなでしたが、ふたりとも無事、演題発表は大成功。二人でお互いがんばった成果でした。今では永井博先生とも音信不通となってしまいましたのが、ちょっと残念であります。

自分の薬剤師としての運命を決定付けたのも当研修室でした。数ヶ月の間ではありましたが、調剤薬局に研修にでかけ、その魅力に取りつかれ、今では開局薬局としての薬剤師の人生を歩んで

いくことが、自分の使命であり、誇りだと思っています。

なかなか腰の落ち着かぬ状態で、初めは研修先であった調剤薬局に就職し、個人経営の調剤薬局の大病院前店、次いで個人病院の門前薬局（このお店は立ち上げにも関わりました。）を経験し、(株)スギヤマ薬品に転職後、大病院前である城北病院前店に1年弱勤務し、今年の7月に現在の御器所店に異動となり、やっと落ち着いてきた心地がします。現在の薬局は、煎じ薬を中心とした小児の漢方を取り扱っており、他に美容を主とした皮膚科の処方せんを取り扱っています。自分の業務担当も煎じ薬の管理ということで、今までにない経験をしています。漢方もいわゆる日本で行なわれてきた和漢薬の考え方ではなく、中医学を基に行われているので、なかなか奥が深く一筋縄ではいきません。それが、自分の知識欲を掻き立てているのでしょうか、毎日楽しい日々を過ごしております。

いつの間にか在籍年数は他のOBよりも長くなりました。というのも、現在でも研究員として、当研究室に籍を置いているからです。昨年度からは、自分の薬局で起きた問題を4年生の卒論のテーマとして取上げていただき、またそのお手伝いもさせていただいています。これも自分にとっては、非常に貴重な経験であり、毎日勉強となっています。また、自分の人間的な成長に大きく影響を与えてもらっています。人を教え、成長させる難しさ、そのためには自分も成長し続けなければならないことを痛感する日々です。その中でも、今年度は、小嶋智子さん、池原尋子さん（現在 当研究室院生 M1）とともに2回も一緒に学会発表ができたことは、この上ない喜びです。

これからもお世話になり続けることと思いますが、当研究室とともに一開局薬剤師として歩んでいきたいと思っています。

小林 美智子

研究室の先生方、皆様、お久しぶりです。

私は地元へ戻ってまる4年になろうとしています。生活ぶり、仕事ぶりは相変わらず変化がありませんが、毎日忙しくがんばっています。

柴田 里美（旧姓 石川）

研究室10周年おめでとうございます。

在籍中に5周年を記念してイベントを行ってから早5年経ったということで、時の流れを感じさせられます。研究室では、よく西田教授に叱咤されていたことが一番記憶に濃く、そのおかげ??で、同期は一致団結していたと思います。みんなでいろいろイベントを計画したり、国試の勉強をしたり、何だかんだといいながら楽しかった思い出です。

後藤 美紀

研究室では、大変だったけど、そのおかげで今の仕事もがんばられています。

安部 智子

研究室で過ごした3年間は本当にいろいろありました。よく怒鳴られて学生生活の中で一番苦しくて、つらい時だったように思います。でも、充実していたし、同期のつながりも強くなって、今ではすごくなつかしい気持ちもあります。

病院で働いているのですが、淡々とした日々を送ってしまってます。

第四期生（平成 10 年 3 月卒業）

河崎 一久

大学を卒業して 10 年ぐらいになるんですか。研究室では先生はもちろん、皆が朝早くから夜遅くまで、休みとか関係なく精力的に研究に打ち込んでいた姿が印象に残っています。

宇野 陽子

研究室では、少ない 4 年生と院生の先輩と協力して、次々にやってくる行事をなんとか乗り越えていったという印象が大きいです。現在は、調剤、服薬指導を主に行っています。まだまだ知識不足で、勉強、勉強の毎日です。

齋藤 仁美

10 周年、おめでとうございます。

臨床薬学研究室では、たった 1 年という短い間でしたが、大変お世話になりました。ますますのご発展を願っています。

深和 加奈

就職してはや 3 年目になりますが、研究室で学んだことを生かして、調剤や病棟活動のかたわら、実験などの手伝いもしながら働いています。

来月の東海薬物治療研究会では、共同演者として発表させていただきますが、西田教授をはじめ、稲垣先生、岡本先生も座長、演者として参加されることを知り、大変、光栄に思っております。

第五期生（平成 11 年 3 月卒業）

服部 綾（旧姓 遠藤）

臨床薬学研究室創立 10 周年おめでとうございます。

育児と仕事で忙しくなかなかそちらに伺うことができませんが、西田先生他、諸先生、諸先輩方に教えて頂きたいいろいろなことを日々心に留めながら、毎日向上心を持って頑張っております。今後とも、西田先生、岡本先生のご健康と、研究室の更なる発展を心からお祈りしております。

濱保 英樹

大学院を修了して 1 年半が過ぎ、研究室で得た知識、技術、コミュニケーションスキルを元に日々勉強を続けています。

学会等の折には臨薬の業績を見て、研究室の皆さんの発表に思いをはせています。

加藤 吉祥

西田先生には、よくおこられた思い出がありますが、それ以上に様々な経験をさせていただきました。USC の学生との思い出や研究室旅行、それから様々なところに人脈が広がったと思います。今は、経営企画という薬学から見れば少し新しい分野で悪戦苦闘しています。

寺町 真理

10月より呼吸器病棟にて病棟業務を行っています。日々、勉強で、毎日、有意義に過ごしております。研究室での3年間の経験を生かしこれからも努力していきつもりです。

第六期生（平成12年3月卒業）

内山 武久

私が臨床薬学教室にお世話になったのは、修士の2年間だけで、特に修士1年の時は、教室へ足を運ぶことが少なく先生方に大変ご迷惑をおかけしました。修士2年の時は、教室旅行に行ったり、学部実習を手伝ったりと、4年生とも交流がもて、教室の皆さんに少しは私のこと、覚えていただけたのでしょうか？卒業してから、大阪大学の博士課程へ進学いたしましたが、それも半年で退学(>_<)！、神戸学院大学薬学部就職することになりました(^0^)/。何となく、西へ西へ流されているってカンジです。昭和大学からみえた徳山先生と共に、新設の研究室を立ち上げているところです。今となっては遅いかもしれませんが、西田先生、鍋島先生、松葉先生といったお世話になった先生方の苦勞とありがたみがようやく分かってきました。親の心子知らず、とはよく言ったものですね。まだまだ至らない点が多々ありますので、ご指導の程宜しくお願いいたします。また、大学教育に対する意見がございましたら、是非伺いたいと思っております。薬剤師育成の教育もさることながら、まずは学位取得に向けて頑張っていきます。

森川 拓

大学時代の論文をより発展させたい！！

若山 尚登

今年結婚しました。

第七期生（平成13年3月卒業）

覚前 有希子

臨床薬学研究室10周年おめでとうございます。

私がこの研究室へ所属して、2年余りが経ちます。本当にいろいろなことがありました…。セミナー旅行、卒論発表、学生実習、研究室セミナーなど、イベント盛り沢山の学生生活でした。私は、1年間回り道もしました。当初は“辛いなぁ”と感じていたこともありましたが、今になってみれば、“いい経験ができたのかなぁ”思っています。

現在、私は、藤田保健衛生大学病院で研修中です。これまでの臨床研修とは少し違った貴重な体験をさせて頂いております。

私の学生生活も残りわずかか…自分がどれだけ成長できるか試したいと思います。

佐藤 直子

厳しいところもありましたが、とても楽しい研究室でした。
御礼状の書き方、挨拶等、今、とても役に立っています。

山関 智恵

臨床薬学研究室 10 周年おめでとうございます。

私はこの研究室に学部 4 年生から所属し、2 年余りが経ちますが、研究室では様々な経験をさせていただきました。特に城薬ホールで忘年会をしたことやセミナー旅行が印象に残っています。

現在は 1 年間の病院研修を終え、研究室で修士論文のまとめをしています。残りわずかですが、より良い論文が完成できるようがんばりたいと思います。

第八期生（平成 14 年 3 月卒業）

池原 尋子

私は去年から臨床薬学研究室に所属し、現在は琉球大学医学部附属病院で研修中である。

研究室の思い出として真っ先に思い出されるのは卒論発表前に苦しんだことである。昔からのんびり屋の私としては、せかせかした毎日が少々辛かった。しかし、今ではいい思い出である。

工場見学で原子炉研究所を見学できたことや、学生実習での講義もいい経験となった。

小嶋 智子

西田先生はじめみなさまお元気ですか。

病院の研修会が前々より決まっており、残念ながら同門会に参加することができません。

ひたすら調剤の毎日ですが、勉強しなきゃいけないことは山ほどあります。

山田 哲生

臨床薬学研究室 10 周年おめでとうございます。

10 周年という事で、私が勝手ながら 2002 年度、臨床薬学研究室重大ニュースを考えました。

第 1 位 岡本先生が米国留学から帰国された、第 2 位 セミナー旅行のハイキングで道に迷った、
第 3 位 学生実習の担当が医療薬、薬学科になり、2 回やることになった 第 4 位 脳や心臓などの
模型を購入した等、他にも順位がつけられないくらいの出来事がありました。これからも様々な
ことが起きると思いますが、負けることなく突き進んでいこうと思います。

研 究 業 績

原 著 論 文

平成 5 年度

Atsuya Ikawa, Mikio Nishida, Akira Ookubo, Yoshiyuki Yoshimura, Yoshihiro Tomita, and Jun Kawada : Comparison of a new microcrystalline aluminium oxide and amorphous hydroxide for their binding to phosphate, proteins, nucleotides, lipids and carbohydrates.
Chem. Pharm. Bull., 41, 1055-1059 (1993)

Yoshiyuki Yoshimura, Atsuko Hirano, Mikio Nishida, Jun Kawada, Yasuyuki Horisaka, Yasuo Okamoto, Naoyuki Matsumoto, Kikuji Yamashita, and Tomomichi Takagi : Purification of water-soluble bone inductive protein from bovine demineralized bone matrix.
Biol. Pharm. Bull., 16, 444-447 (1993)

Mitsuhiro Sofue, Yoshiyuki Yoshimura, Mikio Nishida, and Jun Kawada : ADP modifies the function of glucose transporter; Study with reconstituted liposomes.
Biochem. J., 292, 877-881 (1993)

Akira Ookubo, Mikio Nishida, Kenta Ooi, Keisuke Ishida, Yuko Hashimura, Atsuya Ikawa, Yoshiyuki Yoshimura, and Jun Kawada : Mechanism of phosphate adsorption to a three-dimensional structure of boehmite in the presence of bovine serum albumin.
J. Pharm. Sci., 82, 744-749 (1993)

大久保 彰、伊川 篤弥、西田 幹夫、吉村 好之、川田 純、大井 健太、谷 文緒、橋村 優子、樺山 峰明 : 経口リン吸着剤 PT-A のリン酸吸着機構とリン酸イオン吸着に及ぼす生体関連物質の影響
医学と薬学, 29, 961 - 970 (1993)

Yasuyuki Horisaka, Yasuo Okamoto, Naoyuki Matsumoto, Yoshiyuki Yoshimura, Atsuko Hirano, Mikio Nishida, Jun Kawada, Kikuji Yamashita, and Tomomichi Takagi : Histological changes of implanted collagen material during bone induction.
J. Biomedical Materials Res., 28, 97-103 (1994)

Kazuhiro Inagaki, Mark A. Gill, Mark P. Okamoto, and Jane Takagi : Chemical compatibility of cefmetazole sodium with ranitidine hydrochloride during simulated Y- site administration..
J. Parenteral Sci. Tech., 47, 35-39 (1993)

Kazuhiro Inagaki, Jane Takagi, Ed Lor, Kum-Ja Lee, Leslie Nil, and Mark A. Gill : Stability of fluconazole in commonly used intravenous antibiotic solution.
Am. J. Hosp. Pharm., 50, 1206-1208 (1993)

Stanford S. Jhee, Erwin W. Jeong, Alfred Chin, Kazuhiro Inagaki, Janet L. Fox, and Mark A. Gill : Stability of ondansetron hydrochloride stored in a disposable, elastomeric infusion device at 4 .
Am. J. Hosp. Pharm., 50, 1918-1920 (1993)

臼田 俊和、日下部 紀巳子、磯谷 聡、大津 稔彦、恒川 由巳、稲垣 員洋：皮膚麻酔薬リドカイン
クリームの貼付時間短縮に関する検討
Skin Surgery , 2, 25 - 30 (1993)

Frank M. Pompilio, Janet L. Fox, Kazuhiro Inagaki, Jin-Pil Burm, Stanford Jhee, and Mark A. Gill :
Stability of ranitidine hydrochloride with ondansetron hydrochloride or fluconazole during simulated Y-site
administration.
Am. J. Hosp. Pharm., 51, 391 - 394 (1994)

Yoshihiro Okamoto, Hitoshi Yoshida, Mitsuhiro Ino, Shin-ichiro Nakamura, Gen Okamoto, Kouichi
Mizoguchi, Yasuo Suzuki, Junko Sugatani, and Masao Miwa : PAF-releasing factor in human serum and
inflammatory exdate.
J. Lipid Med., 8, 151 - 156 (1993)

平成 6 年度

Yasuyuki Horisaka, Yasuo Okamoto, Naoyuki Matsumoto, Yoshiyuki Yoshimura, Atsuko Hirano, Mikio
Nishida, Jun Kawada, Kikuji Yamashita, and Tomomichi Takagi: Histological changes of implanted collagen
material during bone induction.
J. Biomed. Res., 28, 97-103 (1994)

Hirofumi Shibata, Yoshihiko Odahara, Fumiko Sasaki, Osamu Hirota, Mikio Nishida, and Isamu Tani: The
presence of low molecular weight germinative substances in *Bacillus cereus* T spore extract.
Microbiol. Immunol., 38, 519-525 (1994)

平成 7 年度

岡本 能弘、小嶋 哲人、勝見 章、山崎 鶴夫、濱口 元洋、西田 幹夫、鈴森 薫、斎藤 英彦：第
VIII 因子遺伝子逆位(Inversion)解析の重症血友病 A 保因者診断、出生前診断への応用。
臨床血液, 36, 1252-1256 (1995)

平成 8 年度

Tomio Yamazaki, Akira Katsumi, Kazuo Kagami, Yoshihiro Okamoto, Isamu Sugiura, Motohiro Hamaguchi,
Tetsuhito Kojima, Junki Takamatsu, Hidehiko Saito: Molecular basis of a hereditary type I protein S
deficiency caused by a substitution of Cys for Arg474.
Blood, 87, 4643-4650 (1996)

Yoshihiro Okamoto, Tomio Yamazaki, Akira Katsumi, Tetsuhito Kojima, Junki Takamatsu, Mikio Nishida,
Hidehiko Saito: A novel nonsense mutation associated with an exon skipping in a patient with hereditary
protein S deficiency type I.
Thrombosis and Haemostasis, 75, 877-882 (1996)

Tomio Yamazaki, Motohiro Hamaguchi, Junki Takamatsu, Yoshihiro Okamoto, Akira Katsumi, Kazuo Kagami, Isamu Sugiura, Tetsuhito Kojima, Hidehiko Saito: Analysis for heterozygosity of protein S mRNA: application to genetic screening and family studies in hereditary protein S deficiency.
Int. J. Hematology, 64, 119-125 (1996)

Tomio Yamazaki, Akira Katsumi, Yoshihiro Okamoto, Toshio Takafuta, Shinobu Tsuzuki, Kazuo Kagami, Isamu Sugiura, Tetsuhito Kojima, Kingo Fujimura, Hidehiko Saito: Two distinct novel splice site mutations in a compound heterozygous patient with protein S deficiency.
Thrombosis and Haemostasis, 77, 14-20 (1997)

Yoshihiro Okamoto, Reiko Oshima, Kazuhiro Inagaki, Saburo Aita, Hideo Nishioka, Yumi Kondo, Hiroshi Ishizuka, Jitsuya Takada, Mikio Nishida: The presence of a manganese-rich particle in lysosome of rat pancreas due to excess manganese treatment.
Biochem. Mol. Biol. Int., 41, 389-394 (1997)

平成 9 年度

Yoshihiro Okamoto, Hiroko Murakami, Mikio Nishida : Detection of interleukin 6-producing cells among various organs in normal mice with an improved enzyme-linked immunospot (ELISPOT) assay.
Endocrine J., 44, 349-355 (1997)

Manako Hanya, Yuki Itoh, Hisae Hiraiwa, Toshiharu Arakawa, Kazuhiro Inagaki, Yoshihiro Okamoto, Tetsuro Ando, Tsutomu Yanagi, Mikio Nishida : An in vitro study on the release of caffeine from an agar-jelly preparation for a patient with tremors.
病院薬学, 23, 375-380 (1997)

Yoshihiro Okamoto, Yusuke Hara, Yayoi Katoh, Hiroshi Nagai, Mikio Nishida : A simple quantitative measurement of mRNA of human β -actin by reverse transcription competitive PCR with a compact digital camera.
Biol. Pharm. Bull., 20, 1013-1016 (1997)

Yoshihiro Okamoto, Hiroshi Ishizuka, Yumi Kondo, Hideo Nishioka, Yasuhiko Kamoi, Mikio Nishida. : A possible induction of primary lysosome in the pancreatic cell due to excess manganese.
Biomed. Res., 9, 29-33 (1998)

平成 10 年度

Kazuhiro Inagaki, Motoya Kambara, Munemichi Mizuno, Jun Okuda, Mark A. Gill, and Mikio Nishida : Compatibility and Stability of Ranitidine Hydrochloride with Six Cephalosporins During Simulated Y-Site Administration.
Int. J. Pharmaceutical Compounding, 2, 318-321 (1998)

Yoshihiro Okamoto, Yusuke Hara, Satomi Ishikawa, Mikio Nishida : Quantitative measurement of protein S gene expression by reverse transcription-competitive PCR method; Determination of mRNA level in fractionated human peripheral blood cells and various cultured cell lines.
Biochem. Mol. Biol. Int., 44, 877-885 (1998)

Yoshihiro Okamoto, Tomoko Abe, Takashi Niwa, Shinobu Mizuhashi, Mikio Nishida : Development of a dual color enzyme-linked immunospot (ELISPOT) assay for simultaneous detection of murine T helper type I (Th1)- and T helper type II (Th2)-cells.
Immunopharmacology, 39, 107-116 (1998)

大津 史子、矢野 玲子、稲垣 員洋、榊原 仁作、奥田 潤：患者の自覚症状（訴え）及び患者背景の評価点を用いた医薬品副作用の推測に関する研究（第1報）薬物性肝障害
薬学雑誌, 118, 272-286 (1998)

Katsuhiro Goto, Masako Oda, Hiroshi Saitoh, Mikio Nishida, Masahiko Takada: Effect of side chains including the N-methyl-tetrazole-thiol group of β -lactam antibiotics on transport in cultured kidney epithelial cells LLC-PK1.
Biol. Pharm. Bull., 21, 1113-1116 (1998)

Yoshihiro Okamoto, Taku Nagai, Tomoko Abe, Satomi Ishikawa, Hiroshi Ishizuka, Mikio Nishida : Unchanged cytokine production under the exposure of excess manganese.
Biomed. Res., 9, 179-185 (1998)

渡辺 法男、山村 恵子、玉置 紀子、山川 真名美、西田 幹夫、桜井 恒久、鍋島 俊隆：「お薬手帳」を利用した入院患者に対する服薬指導の評価
病院薬学, 25, 34-39 (1999)

平成 11 年度

Yoshihiro Okamoto, Chinae Watanabe, Yasuko Katada, Yusuke Hara, Mikio Nishida : A study on the optimal condition of ligation reaction in gene analysis of hereditary protein S deficiency.
J. Appl. Ther. Res., 2, 225-229 (1999)

Yae Hattori, Manako Hanya, Atsumi Kondoh, Yoshimi Tsunekawa, Tatsuo Ito, Kazuo Tsuzuki, Sigemitsu Ito, Kazuhiro Inagaki, and Mikio Nishida: Dosing of a child with a liquid form of cyclosporin using various measuring devices.
J. Appl. Ther. Res., 2, 299-304 (1999)

Yoshimitsu Gotoh, Yoshihiro Okamoto, Osamu Uemura, Naoko Mori, Soichi Tanaka, Tsunesaburo Ando, Mikio Nishida. : Determination of age-related changes in human soluble interleukin 2 receptor in body fluids of normal subjects as a control value against disease states.
Clin. Chim. Acta, 289, 89-97 (1999)

Katsuhiro Goto, Kazuhiro Inagaki, Masako Oda, Hiroshi Saitoh, Yoshiharu Kobayashi, Yoshihiro Okamoto, Mikio Nishida. : Further evidence on structural and activity relationship between effect of side chains including N-methyl-tetrazole-thiol groups of cephem antibiotics and their urinary γ -carboxyglutamic acid excretion.
Biomed. Res., 10, 165-170 (1999)

稲垣 員洋, 荒川 利治, 山本 康司, 西田 幹夫, 石原 廣男, 奥田 潤, 伊藤 幹雄, 高羽 祥三, 砂田 久一: 薬学部新入生の病院薬剤師業務見学, Early Exposure の効果
病院薬学, 26, 123-129 (2000)

Kazuhiro Inagaki, Yuriko Miyamoto, Noriko Kurata, Shigeki Nakane, Mark A.Gill, and Mikio Nishida : Stability of ranitidine hydrochloride with cefazolin sodium, cefbuperazone sodium, cefoxitin sodium and cephalothin sodium during simulated Y-site administration.
Int. J. Pharmaceutical Compounding, 4, 150-153 (2000)

大津 史子、矢野 玲子、稲垣 員洋、榊原 仁作: 患者の自覚症状(訴え)及び患者背景の評価点を用いた医薬品副作用の推測に関する研究(第2報)錐体外路障害
薬学雑誌, 120, 120-131 (2000)

Yoshihiro Okamoto, Yoshimitsu Gotoh, Hirotaka Tokui, Akira Mizuno, Yoshiharu Kobayashi, Mikio Nishida : Characterization of the cytokine network at a single cell level in mice with collagen-induced arthritis using a dual color ELISPOT assay.
J. Interferon. Cytokine Res., 20, 55-61 (2000)

平成 12 年度

Yoshihiro Okamoto, Yoshimitsu Gotoh, Yoshiharu Kobayashi, Akira Mizuno, Hirotaka Tokui, Mikio Nishida: Detection of interleukin-12 (IL-12)-secreting cells in normal mice with enzyme-linked immunospot (ELISPOT) assay.
J. Immunoassay, 21, 25-37 (2000)

Takuro Sugihara, Isao Takahashi, Tetsuhito Kojima, Yoshihiro Okamoto, Koji Yamamoto, Tadashi Kamiya, Tadashi Matsushita, Hidehiko Saito: Identification of plasma antibody epitopes and gene abnormalities in Japanese hemophilia A patients with factor VIII inhibitors.
Nagoya J. Med. Sci., 63, 25-39 (2000)

Eiichi Mikami, Tomomi Goto, Tsutomu Ohno, Hiroshi Matsumoto, Mikio Nishida: Simultaneous analysis of naproxen, nabumetone and its major metabolite 6-methoxy-2-naphthylacetic acid in pharmaceuticals and human urine by high-performance liquid chromatography.
J. Pharmaceutical and Biomedical Analysis, 23, 917-925 (2000)

Eiichi Mikami, Tomomi Goto, Tsutomu Ohno, Hiroshi Matsumoto, Kazuhiro Inagaki, Hiro-o Ishihara, Mikio Nishida: Simultaneous analysis of anthranilic acid derivatives in pharmaceuticals and human urine by high-performance liquid chromatography with isocratic elution.
J. Chromatography B, 744, 81-89 (2000)

Yoshihiro Okamoto, Fumio Nasu, Yumi Kondo, Yasuhiko Sato, Saburo Aita, Jitsuya Takada, Hiroshi Ishizuka, Kazuyoshi Nishikawa, Yoshiharu Kobayashi, Mikio Nishida: Further evidence to support a manganese accumulation in lysosomes of the pancreas in rodents.
Biomed. Res., 11, 225-229 (2000)

村田 明隆、石原 廣男、半谷 眞七子、佐々 弥栄子、廣瀬 公人、山本 康司、荒川 利治、稲垣 員洋、岡本 能弘、杉原 久義、西田 幹夫: 安定性データに基づく高カロリー輸液中のビタミン投与量に関するシュミレーション
病院薬学, 27, 15-23 (2000)

平成 13 年度

臼田 章則、巽 恒治、岡本 能弘、西田 幹夫: 地域の調剤薬局・薬剤師による在宅医療の活動について 名古屋市を例とした現状分析と将来への展望
医療薬学, 27, 481-491 (2001)

Tomoko Abe, Tetsushi Yoshikawa, Masaru Ihira, Kyoko Suzuki, Sadao Suga, Mikio Nishida, Minoru Nagata, Yoshizo Asano: Quantitation of human herpesvirus 6 DNA in Infant with exanthem subitum by microplate PCR-hybridization assay.
Pediatr. Inter., 43, 372-378 (2001)

平成 14 年度

Eiichi Mikami, Tomomi Goto, Tsutom Ohno, Hiroshi Matsumoto, Mikio Nishida: Simultaneous analysis of dehydroacetic acid, benzoic acid, sorbic acid and salicylic acid in cosmetic products by solid-phase extraction and high-performance liquid chromatography.
J. Pharmaceutical and Biomedical Analysis, 28, 261-267 (2002)

Hany Ezzeldin, Yoshihiro Okamoto, Martin R. Johnson and Robert B. Diasio: A high-throughput denaturing high-performance liquid chromatography method for the identification of variant alleles associated with dihydropyrimidine dehydrogenase deficiency.
Anal. Biochem., 306, 63-73 (2002)

Takashi Niwa, Makoto Nakao, Seiko Hoshi, Kiyofumi Yamada, Kazuhiro Inagaki, Mikio Nishida, Toshitaka Nabeshima: Effect of dietary fiber on morphine-induced constipation in rats.
Biosci. Biotechnol. Biochem., 66, 1233-1240 (2002)

総 説

平成 6 年度

稲垣 員洋 : 【総説】日米薬学教育における問題点について
愛知県病院薬剤師会雑誌, 22, 2-9 (1994)

平成 12 年度

岡本 能弘、西田 幹夫 : 慢性関節リウマチの発症とサイトカインバランス
薬学雑誌, 121, 131-138 (2001)

平成 13 年度

Yoshihiro Okamoto, Mikio Nishida: The measurement of interleukins by ELISPOT assay with particular application for Dual Color Analysis (Stardust Assay). Interleukin Protocols (Ed. by Luke A. J. O'Neill & Andrew Bowie)

Methods in Mol. Med., Humana Press, 60, 29-39 (2001)

著 書

平成 5 年度

西田 幹夫：「病気とくすり」、甲状腺治療薬
薬局, 45, 407 - 410 (1994) 南山堂

西田 幹夫：生体微量元素（桜井弘、田中英彦 編）広川書店（1994. 3. 15 初版）
生物実験法 a) 小動物 , p.120 - 124.; 必須微量元素 Mn, p.169 - 175 .; 必須微量元素 I, p.217 - 222 .

平成 6 年度

二宮 英、稲垣 員洋、大津 史子（二宮 英 編著）：わかりやすい薬の知識。
新日本法規 （平成 7 年 3 月）

平成 7 年度

稲垣 員洋（共著）：薬学生のための添付文書の読み方、広川書店（平成 7 年 12 月）

平成 12 年度

岡本 能弘、西田 幹夫（分担翻訳）：アブライドセラピューティクス 症例にもとづく薬物治療 日
本語版（緒方 宏泰、越前 宏俊、増原 慶壮 編）株式会社テクノミック(2000)

平成 13 年度

西田幹夫（分担執筆）：病態と薬物治療 第 2 版（重信 弘毅 編）廣川書店、215 - 241（2001）

その他

平成5年度

稲垣 員洋：米国薬学教育の進展 - これからの薬剤師教育（会員から）
ファルマシア, 29, 197 (1993)

都築 一夫、稲垣 員洋、半谷眞七子：小児腎不全における成長障害に関する研究（小児腎不全における血中カルニチン濃度に関する研究）
平成4年度腎不全医療研究事業（厚生省）報告書

西田 幹夫：グルコーストランスポーターの多機能性
生体の科学, 45, 29 - 31 (1994)

稲垣 員洋：名城大学薬学部の医薬情報センターの活動
Pharmacy Today, 7, 27 - 32 (1994)

平成6年度

Mikio Nishida and Kazuhiro Inagaki: Organs and its subcellular distribution of transition elements in animals.
KURRI Progress Report, I. 330-331 (1994)

Mikio Nishida: Metal ion to affect thyroid functions.
Proc. Sympo. Fundament. Knowledge Appl. Neutr. Acti. Anal. Reactor, 24 (4) 221-227, (1994)

西田 幹夫：歴史に学ぼう - 医薬分業から医薬分担へ
ファルマシア, 30, 365-366 (1994)

稲垣 員洋：世界の薬学事情 - 8 - アメリカ編 南カリフォルニア大学病院薬剤部
クリニカルファーマシー, 10, 27-32 (1994)

稲垣 員洋：臨床薬学と研究 Clinical Pharmacy 問題解決から Pharmaceutical Care 実現へ。
クリニカルファーマシー, 10, 30-35 (1994)

平成7年度

桜井 弘、西田 幹夫、小山 睦夫、高田 実弥：生体内における微量元素の分布と動態：マンガンとバナジウムイオンについて
「原子炉における中性子放射化分析の基礎および応用」専門研究会報告、京都大学原子炉実験所、115-124 (1994)

Yoshihiro Okamoto and Mikio Nishida: Organs and its subcellular distribution of transition elements in animals.
KURRI Progress Reports, S-1, 157-158 (1994)

西田 幹夫： 視点：臨床薬学教育における海外研修
ファルマシア, 31, 885-888 (1995)

西田 幹夫： 薬学教育の現場から：議論の段階から実行の段階へ
月刊薬事, 37, 68-71 (1995)

半谷 眞七子、稲垣 員洋、西田 幹夫： 薬剤師の臨床研修における教育上の課題
愛知県病院薬剤師会雑誌, 24, 2-6 (1996)

稲垣 員洋： 学生実習レポート 5 名城大学学部学生の病院実習 - 体験レポートの紹介 -
クリニカルファーマシー, 11, 87-91 (1995)

平成 8 年度

稲垣 員洋、岡本 能弘、西田 幹夫： 地域医療における医療情報ネットワークと大学医薬情報センターのあり方に関する研究
名城大学総合研究所紀要, 創刊号, 91 - 95 (平成 8 年 3 月)

Yoshihiro Okamoto, Yusuke Hara, Mikio Nishida: Subcellular distribution of transition elements in rat organs.
KURRI Progress Reports, S-1, 171 (1996)

平成 9 年度

Yoshihiro Okamoto, Masami Inagaki, Yusuke Hara, Mikio Nishida: Zinc effect on necrotic lesion caused by pressure sores.
KURRI Progress Report, S-1, pp.137 (1996)

平成 10 年度

稲垣 員洋、岡本 能弘、西田 幹夫： 地域医療における医療情報ネットワークについて
名城大学総合研究所紀要, 3, 55 - 57 (1998)

岡本 能弘、稲垣 員洋、西田 幹夫： Dual Color Enzyme-linked Immunospot 法によるヘルパーT細胞亜集団の解析
名城大学総合研究所紀要, 3, 47 - 53 (1998)

Yoshihiro Okamoto, Taku Nagai, Hitomi Saito, Mikio Nishida: Alteration in essential metal contents in rats and mice after excess manganese administration.
KURRI Progress Report, S-1, pp.180 (1997)

塩見 利明、岡田 啓、黒野 俊介、石川 里美、稲垣 員洋、小林 正： 高血圧診療のプライマリケア 8 . 高齢者の服用の実態と服用の確認方法
血圧, 5, 1259-1264 (1998)

平成 11 年度

稲垣 員洋、岡本 能弘、西田 幹夫： 保険薬局の医薬品情報資料整備に関するアンケート調査
名城大学総合研究所紀要, 4, 101 - 113 (1999)

岡本 能弘、稲垣 員洋、西田 幹夫： 高感度ヒト可溶性インターロイキン 2 受容体 (sIL-2R) 測定
法の開発と本法を用いた体液中 sIL-2R 値の測定
名城大学総合研究所紀要, 4, 115 - 121 (1999)

岡本 能弘：トピックス “ サイトカインバランスの制御による免疫病治療は可能か？ ”
ファルマシア, 35, 165-166 (1999)

Yoshihiro Okamoto, Mikio Nishida : Distribution of essential trace elements in mice organs under diabetic
condition.

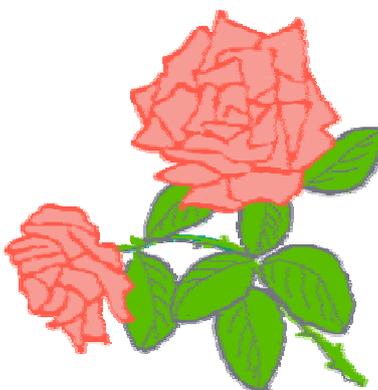
KURRI Progress Report, S-7, pp.190 (1998)

平成 12 年度

岡本 能弘、稲垣 員洋、西田 幹夫： 慢性関節リウマチとサイトカインバランス -病態解明のきざし-
名城大学総合研究所紀要、 5, 85 - 93 (2000)

平成 13 年度

岡本 能弘、村田 明隆、稲垣 員洋、西田 幹夫：安定性データに基づく高カロリー輸液中のビタミン
投与量 に関するシュミレーション
名城大学総合研究所紀要, 6, 87 - 95 (2001)



研究室活動記録

平成5年度

- 臨床薬学研究室が平成5年4月に開設された。
- 西田幹夫 教授が徳島大学 薬学部から赴任した。
- 稲垣員洋 助手が医薬情報センターから当研究室に配置転換された。
- 稲垣員洋 助手が南カリフォルニア大学（USC）との学術協定締結の会議に同行した
- 6月には西田幹夫 教授が鈴木良雄 教授から専攻科長を引き継いだ。
- 稲垣員洋 助手が平成5年度卒業教育において、「アメリカの臨床薬学に関する話題」をテーマに講演した（平成5年6月）。
- 平成4年5月に提携した南カリフォルニア大学（USC）薬学部との学術交流プログラムが本年度実際に稼動し、USC 薬学部における臨床薬学研修プログラム（平成5年8月16日から30日）に専攻科19期生13名（17名中4名は就職試験等と日程が重なった）が参加し、西田幹夫 教授および稲垣員洋 助手が引率した。この臨床薬学海外研究旅行では、2週間口サンゼルスに滞在し、アメリカの臨床薬学を体験したばかりでなく、アメリカの文化、習慣に触れることができ、参加者全員多くのことを学ぶことができた。
- 岡本能弘 助手が当研究室 に10月から加わった。（サッポロビール株式会社 医薬開発研究所より）
- 西田幹夫 教授は、名城大学薬学部が主催する1993年度公開講座講演会 “くすりと健康” において「甲状腺ホルモンの話（健康維持のエース甲状腺ホルモンの魅力）」を講演した（平成5年10月）。
- 西田幹夫 教授は第28回全米病院薬学大会（ASHP MCM Meeting）に参加するため米国ジョージア州アトランタ市に出張し、アメリカの臨床薬学の現状を視察した。
- 稲垣員洋 助手は厚生省委託事業 “薬剤疫学的手法検討事業” として日本薬剤師会が実施する「薬剤疫学情報調査検討会」委員に任命された。
- 本年は研究室設備の整備そして教育、研究体制の確立におおわらわであった。

平成6年度

- 4月に15名の4年生研究室配属学生が決まり、本研究室としては第1期生の学生指導が始まった。
- 配属学生15名のうち11名が卒業論文実験コース（Aコース）を、4名が卒業試験コース（Bコース）を専攻した。
- 5月から研究室セミナーが毎週開催され、4年生を含めた全員が参加した。主として 研究論文の抄読を行った。
- 7月末には研究室セミナー旅行として南紀勝浦へ1泊2日の旅行を実施した。
- 西田幹夫 教授は専攻科海外研修として9名の専攻科生を8月3日から17日までの2週間、アラバマ州バーミンガム市にあるサンフォード大学薬学部へ引率した。
- 稲垣員洋 講師は専攻科海外研修として6名の専攻科生を8月28日から9月10日までの2週間、カリフォルニア州口サンゼルス市にある南カリフォルニア大学（USC）薬学部へ引率した。
- 9月18日、工場見学を実施し、株式会社アラクスを訪問した。
- 4年生はライム病国際シンポジウム - ライム病の現状とライム病ボレリアの生物学（浜松市館山寺、11月12日）に参加し、国際学会を体験した。
- 4年生全員が日本薬剤学会主催の懸賞論文「生命とくすり」に応募した。その結果、中根茂喜君が4位（佳作）入賞を果たした。
- 平成7年3月17日、Aコース11名、Bコース4名、全員が課程を修了した。
- 3月22日、サンフォード大学薬学部長 Dean 教授が夫人とともに来名された。そして 薬

学部長、本部教務部長、および国際交流センターを表敬訪問された。

- 西田幹夫 教授は平成7年9月より「薬学教育の改善に関する調査研究」会議のメンバーとして新しい薬学教育のモデルカリキュラムの編成に参加することになった。
- 稲垣員洋 講師は昨年度に引き続き、厚生省委託事業「薬剤疫学的手法検討事業」として日本薬剤師会が実施する「薬剤疫学情報調査検討会」委員に任命された。

平成7年度

- 配属学生10名全員が卒業論文実験コース(Aコース)を専攻した。
- 5月から研究室セミナーが毎週開催され、4年生を含めた全員が参加した。主として研究論文の抄読を行った。
- 7月末には研究室セミナー旅行として南紀勝浦へ1泊2日の旅行を実施した。
- 西田幹夫 教授は専攻科海外研修として15名の専攻科生を6月17日から29日までの2週間、アラバマ州バーミングラム市にあるサンフォード大学薬学部へ引率した。
- 9月18日、工場見学を実施し、株式会社エーザイ川島工場、くすり博物館を訪問した。
- 4年生が日本薬剤学会主催の懸賞論文「生命とくすり」に応募した。その結果、岩月理恵さんが第2席、亀井雪絵さんが第3席入賞を果たした。
- 平成8年3月19日、Aコース10名全員が課程を修了した。
- 西田幹夫 教授は平成6年度に引き続き、「薬学教育の改善に関する調査研究」会議のメンバーとして新しい薬学教育のモデルカリキュラムの編成に参加した。

平成8年度

- 配属学生12名が卒業論文コース(Aコース)、1名がゼミコース(Bコース)を専攻した。
- 5月から研究室セミナーが毎週開催され、4年生、大学院生を含めた全員が参加した。前期は"Symptom"の輪読、後期は研究論文の紹介を行った。
- 西田幹夫 教授は「アジアの医療薬学」についての検討会(韓国ソウル市、7月)に出席した。
- 稲垣員洋 講師は専攻科海外研修として15名の専攻科生を7月17日から29日までの2週間、アラバマ州バーミングラム市にあるサンフォード大学薬学部へ引率した。
- 8月末には研究室セミナー旅行として南紀勝浦へ1泊2日の旅行を実施した。
- 9月20日、工場見学を実施し、塩野義製薬株式会社摂津工場を訪問した。
- 10月、稲垣員洋 講師は大学院生3人を引率し、American Association of Pharmaceutical Scientists Annual Meeting(シアトル)に参加し、また途中、南カリフォルニア大学(ロサンゼルス)を訪問した。
- 10月、米国よりR. Pachorek (Mercy Healthcare)、C. Stoner (Department of Veterans Affairs)夫妻が名城大学を訪問した。講義、特別講演などを行っていただいた。
- カレッジプラザ'96(11月、名古屋商工会議所)に参加し、当研究室の活動を企業の方々にPRした。
- 西田幹夫 教授は第6回固型剤処方研究会シンポジウム(大阪、平成8年11月)にて「臨床薬学研修生による剤形工夫と薬効評価」の演題で講演を行った。
- 岡本能弘 助手は(株)サンド薬品より、「免疫抑制剤サンディミュン^(R)投与時の血中および尿中サイトカイン量変動の解析」の研究に対して研究助成を受けた。
- 4年生全員が日本薬剤学会主催の懸賞論文に応募した。その結果、安部智子さんが第2席入賞を果たした。
- 平成8年3月18日、大学院修士課程3名、4年生13名の全員が課程を修了した。

平成9年度

- 4年生配属学生3名が卒業論文コース(Aコース)、1名がゼミコース(Bコース)を専攻した。
- 5月より、研究室セミナーを開始した。前期は英字新聞の輪読、後期は研究論文の紹介を

- 行った。
- 職員と大学院生は共同研究打ち合わせ、及び病院の見学のため岐阜平野総合病院を訪問した（5月）。
 - 稲垣員洋 講師は岐阜平野総合病院より研究助成を受けた。
 - 稲垣員洋 講師は専攻科海外研修として20名の専攻科生を6月14日から7月1日までの約2週間、サンフォード大学薬学部に引率した。（米国アラバマ州バーミングハム市）
 - 西田幹夫 教授はサンフォード大学との学術交流協定調印式に出席した。（6月、米国アラバマ州バーミングハム市）
 - 後藤芳充 先生（小牧市民病院、小児科）が研究員として「サイトカインと小児腎疾患」に関する研究に協力することとなった（7月より）。
 - 西田幹夫 教授、および大学院生2人（安部、石川）はサンフォード大学で行われた東アジア臨床薬学会議に参加した（8月、米国アラバマ州バーミングハム市）。
 - 河合塾主催「学問ワンダーランド」にて名城大学薬学部、および当研究室の活動を受験生にPRした（8月、河合塾名古屋校）。
 - 研究室セミナー旅行（8/30-31、岐阜県 恵那峡）を実施し、恒例となっている参加者全員によるセミナーを実施した。
 - サンフォード大学より Dr. R. Lander が本学部を訪問し（9/11-10/4）、学部学生専攻科生、および大学院生の教育に携わった。
 - Sookmyung Women's Univ.より Dr. H. T. Shin が本学部を訪問した（9/12-17）。
 - 西田幹夫 教授は第7回日本病院薬学会年会（9/13-14、名古屋国際会議場）の学会組織委員を、また稲垣員洋 講師は実行組織委員を勤めた。
 - 研究室の工場見学として9月18日、協和発酵工業株式会社、富士工場、製剤研究所（静岡県三島市）を Dr. R. Lander とともに訪問した。
 - サンフォード大学より薬学部長の Dr. J. O. Dean Jr. が名城大学を訪問した（9/30-10/3）。
 - 第2回医薬分業フォーラムの開催に協力した（10/19、名城大学）。
 - 昨年に引き続き、カレッジプラザ97（10月、名古屋商工会議所）に参加し、研究室の活動を企業の方々にPRした。
 - 坂井友吉 先生（北海道リハビリテーションセンター）が本学部を訪問した（10/28-10/31）。
 - 稲垣員洋 講師は学術交流協定校南カリフォルニア大学薬学部へ交流内容打ち合わせのため1月26日から30日まで出張した（米国カリフォルニア州ロサンゼルス市）。
 - 南カリフォルニア大学薬学部より Michael Kabalin および Michelle Yoshimi の2人の学生（6年生）が本学部を訪問し、約2週間にわたって研修を行った（3/9-3/25）。
 - 4年生全員が日本薬剤学会主催の懸賞論文に応募した。その結果、宇野陽子さんが第3席入賞を果たした。
 - 平成10年3月18日、大学院修士課程2名、4年生4名の全員が課程を修了した。

平成10年度

- サンフォード大学薬学部より Dr. T. Sam Roe 夫妻が訪問、日本薬学会第118年会に参加し、共同演者として研究発表を行った。（4月）
- 4年生配属学生3名が卒業論文コース、2名がゼミコースを専攻した。
- 今年度研究室セミナーは前期は"Melatonin -Nature's Sleeping Pill-", Ray Sahelian, Be Happier Press, CA, USA (1995)の輪読、後期は研究論文の紹介を行った。
- 西田幹夫 教授は専攻科海外研修として7名の専攻科生を6月13日から19日までの約1週間、サンフォード大学薬学部に引率した。（米国アラバマ州バーミングハム市）
- 西田幹夫 教授 還暦祝賀会を開催した。卒業生、在学生が多数参加し、西田 教授の還暦を祝った。（名古屋ガーデンパレス、7月）
- 研究室セミナー旅行（和歌山県勝浦）を実施し、恒例となっている参加者全員によるセミナーを実施した。（7月）
- 研究室の工場見学として株式会社ツムラ 茨城工場（茨城県）を訪問した。（9月）

- 南カリフォルニア大学薬学部学生 Meng Heng および Tuan Huang の 2 人が本学部を訪問し、約 1 カ月にわたって研修を行った (9/28-11/1)。
- 西田幹夫 教授は第 2 回東アジア臨床薬学会議開催の打ち合わせに参加した(10月、中国 北京)。
- サンフォード大学薬学部より Dr. R. Lander が本学部を訪問した。(10月 25-28 日)
- 昨年に引き続き、カレッジプラザ 98 (名古屋市、吹上ホール) に参加し、研究室の活動を企業の方々に P R した。(10 月)
- 第 3 回医薬分業フォーラムの開催に協力した。(12 月、東海テレビ、テレビアホール)
- 4 年生全員が日本薬剤学会主催の懸賞論文に応募した。その結果、遠藤 綾さんがみごと第 1 席入賞を果たした。(表彰式：平成 11 年 3 月)
- 平成 11 年 3 月 18 日、大学院修士課程 6 名、4 年生 5 名の全員が課程を修了した。

平成 11 年度

- サンフォード大学より Dr. Bill Keller が訪問、日本薬学会第 119 年会に参加し、研究発表を行った。(平成 11 年 3 月)
- 西田幹夫 教授は大学本部国際交流センター長に就任した。(平成 11 年 4 月)
- 西田幹夫 教授は日本薬学会東海支部庶務幹事を務め、学会運営に協力した。
- 西田幹夫 教授は上海師範学校へ学术交流協定締結で出張した。(平成 11 年 5 月)
- 4 年生配属学生 5 名が卒業論文コース、5 名がゼミコースを専攻した。
- セミナーは前期は「Clinical Pharmacy and Therapeutics」の輪読を行い、後期は学术论文の紹介あるいは薬剤師国家試験対策セミナーを行った。
- 西田幹夫 教授は台湾高級中学、日本語学校へ学生のリクルートを目的に出張した。(平成 11 年 5 月)
- 研究室セミナー旅行を実施し、恒例となっている参加者全員によるセミナーを実施した。(平成 11 年 8 月：和歌山県勝浦)
- 研究室の工場見学として株式会社山之内製薬静岡工場(静岡県焼津市)を訪問した。(平成 11 年 9 月)
- 昨年に引き続き、カレッジプラザ 99 (名古屋市、吹上ホール) に参加し、研究室の活動を企業の方々に P R した。(平成 11 年 11 月)
- 第 32 回日本薬剤師学会大会、および薬学教育シンポジウムの開催に協力した。(平成 11 年 11 月、名古屋)
- 配属 4 年生全員が日本薬剤学会主催の懸賞論文に応募した。その結果、上原俊介君がみごと第 3 席入賞を果たした。(表彰式：平成 12 年 3 月、岐阜)
- 平成 12 年 3 月 17 日、大学院修士課程 3 名、4 年生 10 名の全員が課程を修了した。

平成 12 年度

- 稲垣員洋 先生は助教授に昇格し、医薬情報センター主任として異動した。
- 西田幹夫 教授は昨年度に引き続き大学本部国際交流センター長を務めた。
- 4 年生配属学生 4 名が卒業論文コース、5 名がゼミコースを専攻した。
- 研究室セミナーは、前期に「Melatonin」の輪読を行い、後期に学术论文の紹介および薬剤師国家試験対策セミナーを行った。
- 研究室セミナー旅行を実施し、恒例となっている参加者全員によるセミナーを実施した。(平成 12 年 8 月、和歌山県勝浦)
- 研究室の工場見学として愛知県血液センターを訪問した。(平成 11 年 10 月)
- 産学交流プラザ名古屋に参加し、研究室の活動を地域の企業の方々に P R した。
- 4 年生佐藤直子さんが名古屋学生雇用者協議会の第 14 回アルバイト体験発表論文コンクールでみごと第一席に輝いた。
- 配属 4 年生が日本薬剤学会主催の懸賞論文に応募した。
- 平成 13 年 3 月、大学院修士課程 3 名、4 年生 9 名の全員が課程を修了した。

平成 13 年度

- 岡本能弘 助手が、米国 University of Alabama at Birmingham, Division of Clinical Pharmacology (Prof. R. Diasio)に留学した。(平成 13 年 4 月)
- 研究員後藤芳充先生(名古屋第二赤十字病院)が腎の病態とサイトカインの研究で、名古屋市立大学にて医学博士号を取得した。
- 西田幹夫 教授は第一回アジア薬学教育会議(Pattaya, Thailand)に出席した。(平成 13 年 6 月)
- 第三回東アジア臨床薬学カンファレンスが八事キャンパスで開催され、研究室全員が参加した。(平成 13 年 7 月)
- 西田幹夫 教授が第二回 5 大学国際シンポジウムに参加した。(東京、八王子)
- 研究室セミナー旅行で長野県軽井沢を訪れた。(平成 13 年 8 月)
- 研究室工場見学は京都大学原子炉実験所(大阪 熊取)へ出かけた。(平成 13 年 8 月)
- 名城大学開学 75 周年記念行事が挙行され、研究室は薬学展に参加した。(平成 13 年 9 月)
- 大学院生 5 名のうち 4 名修士課程修了、1 名は病気満期退学。4 年生は 6 名全員が課程を修了した。(平成 14 年 3 月)

